

「共感的文化理解」教材の開発と実践

栗山 文弘

Development of a Teaching Unit for “Sympathetic Understanding of Culture”

Takehiro KURIYAMA

1. はじめに

先に日本国際理解教育学会では、「グローバル化に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究」をまとめ発表した¹。この中で、国際理解教育の学習領域を、「多文化社会」「グローバル社会」「地球的課題」「未来への選択」の4つに区分し設定している²。

本稿では、このうち「多文化社会」に注目し、さらにその下位に位置づけられている「文化理解」「文化交流」「多文化共生」の領域のうち、「文化理解」を取り上げて教材開発を試みる。

ではこの「文化理解」とは、どのような内容構成の視点を持つのかだろうか。「自己の文化についての理解を深めるとともに、日本の他の地域や世界には自分達とは異なる多様な文化を持ったさまざまな人々が存在していることを知り、その違いを相互に認めあうことができる」と指摘されている³。ここには、2つの視点を含んでいることに留意すべきであろう。1つは、「多様な文化を持った様々な人があることを知る」という点で、「知識」として多文化社会を「理解」するという視点である。もう一つは、「その違いを相互に認めあうことができる」という点で、これは、異なる文化を受容する「態度」を養うという視点と捉えられる。

単に「知識」を概念として「理解」するだけでは、「態度」を養うことはできない。様々な文化を学び「こんな文化があるんだな」「へえ、いろんな人があるんだね」で終わっては、それを認める態度を養うことにならない。異なる文化に触れて「こんな人たちがいるんだ。すごいね。私も見習いたい」「こういうことって日本にもあるよね。思いは同じだね」というように、自らの感情を伴って共感しながら理解する仕方を共感的理解と呼ぶ。共感的理解があつてこそ、異なる文化を受容する態度を養うことができると考える。

しかしながら、このように共感的に文化を理解することは、簡単ではない。ついつい異文化に出会ったとき私たちは「おかしな習慣だな」「信じられない」「日本に生まれて良かったな」などと思ってしまう。異文化に対して、自文化中心的な見方、考え方をしてしまうのである。このような見方、考え方自体を脱却することは難しい。しかし、「自文化中心的な見方ではいけない」ということを意識化するようになることが、「違いを相互に認めあうことができる」ためには不可欠であろう。

本稿の目的は、自文化中心的な見方に気づき、共感的に異なる文化を理解するための教材開発を試みることである。

この教材は、筆者が、2006年末に参加した(社)北方圏センター主催の「開発教育ファシリテーター養成事業⁴」で訪れたベトナムスタディツアーの成果を素材に作成した。また、実践にあたっては、本学の教養科目である「スタディスキルズ」の中で取り組んだものである。

2. スタディツアーの成果と教材構想

筆者は(社)北方圏センターによる「開発教育ファシリテーター養成事業」で、平成18年12月22日～29日の7泊8日のベトナムスタディツアーへ参加した。この事業は、開発教育や国際協力に関心のある人を対象に、海外研修(スタディツアー)を実施し、この体験を基に活動する人材の養成を目的としたものである⁵。

スタディツアーでは、参加者が訪問先を決めアポイントをとった施設を訪問した。参加者はとりわけベトナムで暮らす子どもや若ものたちの様子に関心があったため、子どもや若ものいる施設を中心に選定した。訪問施設は中部のフエ市にある「子どもの家」、ホーチミン市の「ストリートチルドレン友の会ビンチュウ能力開発センター」「VJCC ベトナム日本人材センター」「芸術連盟道場」「V-HART 職業訓練学校」「ベトナムYMCA ハンディキャップセンター」等である。

各訪問先では、施設の概要等を職員から説明をうけるだけでなく、そこに集う子どもや若ものたちへのインタビューを行った。質問項目は、プロフィールに関することその他「好きな物」「将来の夢」「ほしいもの」等で、各施設で2～3名、できるだけ男女同数になるように行った。

インタビュー取材を通して貧しい家庭子どもたち、比較的裕福な家庭の子どもたち、障がいを持つ子どもたちの生活の様子に触れることができた。

特に、印象深かったのは、「将来の夢」についてであった。「科学者」「外国の企業で働く」「社長になる」「バイクの修理工」「縫製工場に勤める」「空手の先生」など様々ではあるが、どの子どもたちも将来の夢を尋ねるとしっかり答えてくれた。

ストリートチルドレン友の会で取材した男の子は、科学者になりたいと夢を語ってくれた。日本の男の子なら野球選手や、サッカー選手が人気だろう。ベトナムでは、医者や科学者が子どもに人気だという調査結果がある。また、障がい者マラソンの選手だという女子学生は、大学で薬学を専攻している。夢を尋ねると病院や福祉施設を経営したいと答えてくれた。薬剤師になりたいと答えるだろうと期待していたが、意外な答えに少し驚いた。詳しく話を聞くと、どうやらベトナムには「福祉」を専門に学ぶことのできる大学がないので薬学部で学んでいるとのことだった。障がい者マラソンの大会で日本を訪れたときにバリアフリーのすすんだ社会に感銘したのだそうだ。

このように、子どもたちが抱く将来の夢には、その国や地域の社会、文化的な状況や、経済的な状況が反映される。いわば、社会を映す鏡であると考えることができる。夢に焦点をあてるこ

とで、共感的文化理解の教材となるのではないかと考え構想した。

しかし、一方で個人の夢を通して理解できるベトナムの文化はかなり限定的となってしまう。したがって、従来の文化理解のアプローチ、つまり、言語や習慣、衣食住、宗教などの学習と組み合わせることで単元を構成することとした。また、学習方法に関してはできるだけグループワークにし、参加型の学習ができるように配慮した。グループワークでの、ディスカッションする力や思考力など学習技能の向上も期待できるからである。

表1は、構想した単元「ベトナムの生活と若もの」を整理したものである。教材1として、ベトナムの生活の様子をフォトランゲージを用いて考察する。いわばベトナムの地域性・文化性を概念的に学習する。教材2は、そのような文化のもとでどのような人たちが、どのように暮らし、どのような夢を抱いているかを学び、共感的に理解する。

教材1が概念的な「知識」の獲得に重点をおいており、教材2で異文化を受容する「態度」を養うための「共感的理解」に重点をおくという構造となっている。

表1. 単元「ベトナムの生活と若もの」の構想

	教材1	教材2
教材名	ベトナムの生活	ベトナムの若もの
理解の方法	概念的理解	共感的理解
学習項目	農業／食事／学校／宗教／伝統衣装（アオザイ）／民族／子どもの楽しみ	小学生の将来の夢／人気のスポーツ／経済発展／家族との絆／福祉の状況
学習方法	フォトランゲージ	ロールプレイ・カードゲーム

3. 単元「ベトナムの生活と若もの」

3. 1 単元の目標

上記の構想のもと、単元の目標を以下のように設定した。

[知識・理解]

- 貧困や開発途上国という一面的な理解でなく、ベトナムの産業、衣食住、宗教など文化の特性を多面的に理解する。
- ベトナムに暮らす若ものたちの生き方を共感的に理解する。

[技能]

- 写真を良く観察し、読み取った情報からつながりのあるストーリーを作成することができる。
- 登場人物の立場にたってシナリオを読み、生活や背景の様子を想像することができる。
- 課題解決のために、グループワークに積極的に参加しディスカッションすることができる。

[関心・態度]

- ベトナムの若ものの将来の夢から、ベトナムの若ものと日本の若ものの意識の共通点や相違点、ベトナムと日本の類似点や相違点に関心を持つ。

3. 2 教材1「ベトナムの生活」の概要

(1) 教師の準備：フォトランゲージカード（資料1）

解説カード（資料2）

(2) 主な学習方法：フォトランゲージ

(3) 展開：

この教材に入る前に、ベトナムの地理的位置などを確認する。最近は、インターネットに接続されたパソコンがあればグーグルアースを用いた学習も可能である。自由に縮尺を変えることができるので、都市や農村など地表の様子を拡大し観察させる。学習者は途上国の都市のイメージが乏しく、ホーチミンの景観を見て驚きの声上がる。

地理的な位置を確認した後、学習者を1グループ4～5名程度で7グループに分ける。各グループにフォトランゲージカード（資料1）をランダムに1枚ずつ配布する。フォトランゲージカードは、「農業」「食事」「学校」「宗教」「伝統衣装（アオザイ）」「民族」「子どもの楽しみ」というテーマのもとに、2～3枚の写真で構成されている⁶。

「写真には、テーマがあります。そのテーマは何でしょう。また、写真を見て簡単なお話を語りなさい」と発問する。

学習者は、テーマを見つけたために写真を良く観察する。またお話を つくるために気づいたことをあげてディスカッションが始まる。「気づいたことをあげなさい」告げるよりも活発な活動となる。グループごとに考えたテーマとお話を発表する。

発表が終わったら、「これから各テーマの解説を読み上げます。自分のグループの写真についての解説だと思ったら手をあげてください」と言って解説カード（資料2）をランダムに読み上げていく。複数のグループから手があがった場合は、どのグループが適切かを全体で考えさせた。

解説カードを読み終え、フォトランゲージカードの組み合わせができたなら、すべてのグループに、残りのフォトランゲージカードと解説カードを配布し確認させる。

また、解説カードだけでは不十分な部分は、追加情報として口頭で説明を加える。例えば、「農業」の追加情報としては、農地が国土の2割程度であり山が多いことや、米の輸出量はタイに次いで世界第2位であること。農業の他に水産業も盛んでエビやイカの漁獲量の多くは日本に輸出されていることなどである。「伝統衣装」のアオザイは、キン族の民族衣装であり他の少数民族はそれぞれの民族衣装を持っていることや、「学校」の様子も地域により異なり山岳地帯の少数民族の就学率はまだまだ低いといった情報を伝えることが重要である。限られた写真と解説だけでは

見えない部分があり、ステレオタイプを与えてしまいかねないからである。

最後に「日本と似ているところはどんなところですか。また異なることはどんなことですか、グループで話し合ってください」と告げてグループディスカッションを行い、活動を終える。

3. 3 教材2「ベトナムの若もの」の概要

(1) 教師の準備：プロフィールカード（資料3）

夢カード（資料4）

(2) 主な学習方法：ロールプレイ、カードゲーム

(3) 展開：

学習者を1グループ4人に分ける。「今日は、私がベトナムで出会った4人の若ものたちを皆さんに紹介したいと思います」と言ってプロフィールカード（資料3）を表向きに各グループに1セットずつ配る。4人の若ものとは、貿易大学の学生ハンさん、体育大学の学生クイさん、ストリートチルドレン友の会のセンターであった小学生ヤン君、医療大学の学生で障害者マラソンの選手であるハイさんである。

プロフィールカードには、1枚に1人ずつ彼らプロフィールや家族のこと、生活の様子が、その若もののセリフとして書かれている。1人1枚カードを選んで、カードに書かれている人物になりきって読み合わせをするよう指示する。

一通り読み合わせが終わったら「4人の人たちの将来の夢を訊いてきました。彼らは将来何になりたいと思いますか？ 夢カードから選んでください」と告げ、夢カードを各グループに1セットずつ配る。

夢カードは9枚ある。つまり4枚が正解のカードで5枚ははずれのカードである。学習者が、プロフィールと夢カードの内容を整理していくと、2枚か3枚のカードから正解はどれかを迷うように設定している。学習者が迷うであろう夢カードを整理すると表2となる。

表2. 教材「ベトナムと若もの」のカード構成

人物	将来の夢（正解カード）	はずれカード
貿易大学の学生ハンさん	外国の企業に勤める	何になりたいかわからない
体育大学の学生クイさん	空手の指導者	野球の指導者、剣道の指導者
小学生のヤン君	科学者	大工になりたい
医療大学の学生ハイさん	病院経営や福祉の仕事	薬剤師

プロフィールカードと夢カードの組み合わせが出来上がったら、「ところで、彼らがどんな姿をしているか気になりませんか？ 正解のカードを選んだグループは、彼らに出会うことができます」と告げる。

プロフィールカードと夢カードの裏にはそれぞれ半々ずつイラストが描かれており、正解の組み合わせができると、人物のイラストが出来上がる。「せーのっ」と一斉にカードをめくると「やったー正解」「あー間違えたー」と声上がる。授業の盛り上がる場面である。

一人ずつカードをめくるごとに解説を行う。このゲームで取り上げた4人の夢は、ベトナムの文化や社会の現状を表すものになっている。それぞれの人物の夢が示す文化・社会状況を整理したものが表3である。以下の内容をもとに学習者に解説する。

表3. 教材「ベトナムの若もの」の学習内容

人物	将来の夢	ベトナムの社会・文化状況
貿易大学の学生ハンさん	外国の企業に勤める	経済発展／家族との絆
体育大学の学生クイさん	空手の指導者	人気のスポーツ
小学生のヤン君	科学者	小学生の将来の夢
医療大学の学生ハイさん	病院経営や福祉の仕事	福祉の状況

貿易大学のハンさんのように、日本語・英語などの語学や、商学を学ぶ学生は多い。ドイモイ政策以降、外資系の企業の進出がすすんでおり、2007年1月にWTOに加盟したことでこうした動きは一層加速している。このような外資系の企業に勤めたり、さらには独立して起業したいと望む若ものが多いのである。経済成長著しい中で、大きな夢を抱いて努力している若ものの姿が見えてくる。また、親は子どもの教育に力を入れ、子どもは、成長すると親を養うという意識を強くもっている。家族の絆の強さも理解することができる。

体育大学のクイさんからはベトナム人気のスポーツを理解することができる。ベトナムでは、武道が盛んで、空手だけでなく、韓国のテコンドーや、ベトナム武道にも人気がある。ホーチミンの小学生に訊いた人気のスポーツ調査によれば、1位：ベトナム武道、2位：サッカー、3位：水泳、4位：エアロビクスとなっている⁷。「これらのスポーツの共通点は何でしょうか？」と発問すると「用具を多く使わないこと」という回答を導くことができる。サッカーが世界中で盛んなこともボール1つでできることが理由の1つであると気づくことができる。

ヤン君のように科学者になりたいという子どもたちも多い。ホーチミンの小学生に訊いた人気の職業は、男子は1位：医師、2位：科学者、3位：技師、女子は1位：医師、2位：教師、3位：科学者となっている⁸。一方、日本の子どもたちに人気の職業は、男子が1位：野球選手、2位：サッカー選手、3位：医師、4位：研究者・大学教員、同4位：大工、6位：マンガ家・イラストレーターとなっており、女子が、1位：保育士・幼稚園教諭、2位：看護師、3位：

マンガ家・イラストレーター4位：芸能人、5位：ケーキ屋・パティシエ、6位：学校の先生、という結果となっている⁹。

これらを提示し、「日本とベトナムの子どもが抱く将来の夢の共通点や相違点はなんですか？」と比較をさせる。ベトナムでは医師や科学者など社会的地位の高い職業に憧れる子どもが多いことや、日本に比べて男女の差がすくないといったことに気づくことができる。

障がい者マラソンの選手ハイさんは、医療大学で薬学を専攻している。筆者はインタビューの際、薬剤師を目指しているのではないかと予想していたが、夢を訊くと返ってきた答えは、「病院や福祉施設をつくりたい」という大きな夢を持っており驚かされた。障がい者マラソンの国際大会に出場するために日本など先進国に訪れたことのある彼女は、バリアフリーが進んだ社会に驚かされた。車いすで生活する彼女にとって信号も少なくバイクであふれるホーチミンの街で生活することは困難が多い。ベトナムでもバリアフリーを進めたい、福祉に関わることがしたいと考えたが、未だベトナムでは福祉を専門に学ぶことのできる大学がなかったのである。そのために近接領域である医療大学に進学し薬学を専攻したのだそうだ。

このエピソードは、福祉の分野が立ち後れているベトナムの状況を端的に表している。しかし、これから福祉に取り組んでいこうと努力するハイさんの姿を通して知ることによって「遅れているんだな」「かわいそうだな」といったネガティブな印象を与えずに理解することができる。

解説の後、4人以外にも出会った若ものたちのことを短時間で紹介し、授業を終えた。取り上げた4人は、ゲーム的な要素に適していることから選定したが、それ以外にも様々な人がいることを理解させたかったからである。

(4) 共感的理解をもたらす学習過程

以上の学習過程を整理すると、以下ようになる。

①ロールプレイ

人物に関する情報が含まれているセリフをできるだけ気持ちをこめて読むことによって、その人物の立場になって考える。

②夢の予想

プロフィールの情報をもとに、その人物の立場になったつもりで将来の夢を推察する。

③解答

人物のイラストにより、ビジュアルに捉えることでイメージが具体化する。

④解説

人物個人の視点から、社会・文化的な視点へと視野をひろげて捉え直す。

このようなプロセスにより、遠くはなれたベトナムの若ものたちを身近に感じつつ、社会・文

化的な状況も共感的に理解することが可能となると考える。

4. 学生の反応と評価

4. 1 学習前の学生の意識

本単元を、「スタディスキルズ」受講生である保育科1年生42名に対し実施した。この科目は、レポートの書き方や、ディスカッションの練習など、大学生生活で必要となる基礎的学習スキルを身につけさせることを目的としており、1年次前期に必修科目として開講している。

本単元の実施時期は、2007年6月で2週にわたって行った。先に述べた本単元の技能目標が、科目の目的と合致しているからである。また、国際理解に関する科目は、1年次後期に「国際理解論」が開講されるのみであり選択科目となっている。「国際理解論」を受講する学生には、より関心を持つきっかけとして、また、受講しない学生にも異文化を受容する「態度」を少しでも身につけてほしいと考えて実施することとした。

単元の授業を行う前に学生対し、東南アジア、ベトナム、ベトナムの子どもや若ものそれぞれのイメージについて自由記述させた。これらの内容を筆者が、ポジティブ／ネガティブ／その他・中性／という観点で分類したものが表4である。

東南アジア、ベトナム、子どもや若ものいずれのイメージでも、ポジティブなイメージは少なく、ネガティブなイメージが多く回答された。ネガティブなイメージからは、戦争や内戦などの影響で劣悪な環境の中、貧困が蔓延しているというイメージで捉えていることが浮かび上がってくる。貧困の結果として子どもや若ものたちは「勉強のことを知らない」「自分の好きなことをできない」というような抑圧されているイメージにつながっているのではないかと。

確かに、ベトナム戦争という負の遺産を抱えていることは歴史的事実である。しかし、ベトナム戦争が終結して30年以上の時間の中で復興し、経済発展をとげつつあるのが現在のベトナムの姿である。このようなネガティブなイメージばかりで捉えていることは、偏っていると言えよう。

中性・その他に分類した回答には、主に文化的な特徴があげられている。ベトナムのイメージの中であげられている「お米の国」「ライスペーパー」「生春巻き」は食文化を、「アオザイ」は衣文化を正しく理解している。しかし、一方で「ムエタイ」や「トムヤムクン」は近隣タイの文化を混同している。さらに、「ラクダ」「アラジン」「砂漠」などは中東や西アジアの文化と混同している回答が見られた。

このように、本単元を学習する前に学生たちは、ネガティブなイメージに偏った認識を持っていたり、間違った知識を身につけていることが明らかになった。

表4. 授業前の学生のイメージ

	ポジティブ	ネガティブ	中性・その他
東南アジアのイメージ	料理がおいしそう／海で自由に泳げそう／海がきれい	貧しい／治安が悪い／病気がある／麻薬／汚い／裕福でない／発展していない／貧富の差が大きい／マフィアがいそう	熱帯雨林／暑い／独特の文化／宗教／物価がやすい／国の面積が小さい／大量生産／工業中心／工業や農業が盛ん／早口で声大きい／黒い人がいる／色黒／手でごはんを食べる／巻き付ける服／米が細い／カレーが辛い／バナナ／アジアフルーツ／よくわからない
ベトナムのイメージ	人が明るい／経済が活発	ベトナム戦争／今も戦争／治安が悪い／内乱／激しい戦争／戦争が多い／貧しい／貧困難民の子ども／裸足の子ども／人が汚いような黒さ／建物が少ない／環境があまり良くない／地雷が多い／Give me chocolate／虫が多い／他のアジアの国より発展がおくれている／不衛生／荒地／お米がパサパサ／かわいそう	ベトナムドクちゃん／お米の国／ライスペーパー／フォー／生春巻き／パクチー／食べ物の種類が豊富／農業・漁業が盛ん／大量生産／多民族国家／舟に乗って移動／湿度や気温が高い／アオザイ／ココナツミルク／日本人を黒くした感じ／ラクダで遊牧／砂漠／アラジン／ムエタイ／トムヤムクン／結婚前の人は顔を隠している
ベトナムの子ども・若もののイメージ	スタイルのいい人が多い／運動能力が高い	貧しい／ストリートチルドレン／ゴミを拾っている／戦争で親がいない／足が片方ない子がいそう／地雷で手足がない／学校の勉強を受けられない／障害がある／生活が苦しい／働く所がない／職がない／若い頃小さい頃から働く／服装が清潔でない／ボロボロの服／裸足で歩いている／貧富の差が激しそう／勉強のことを知らない／自分の好きなことをできない	サッカーが盛ん／のんびりしている／いつも半袖／民族衣装の関係で細い人が多い／白いTシャツを着ている／布を身にまとっている／流行にとられていない

4. 2 学習後の学生の意識の変化

授業後の学生のコメントをもとに意識の変化を考察する。先に本時の目標を提示した。技能目標は、観察により評価した。ここでは、共感的な文化理解がどの程度達成されたかを考察するために知識・理解目標と態度目標の2点を取り上げる。目標はそれぞれ次の通りであった。

【知識・理解】

- 貧困や開発途上国という一面的な理解でなく、ベトナムの産業、衣食住、宗教など文化の特性を多面的に理解する。【目標1】
- ベトナムに暮らす若ものたちの生き方を共感的に理解する。【目標2】

[関心・態度]

- ベトナムの若ものの将来の夢から、ベトナムの若ものと日本の若ものの意識の共通点や相違点、ベトナムと日本の類似点や相違点に関心を持つ。【目標3】

表5は授業後のコメントのから、学生たちの気づきの典型的なものをまとめたものである。

「授業を受ける前、私はベトナムがどこにあるのかさえはっきりわからないほど無知であり、興味はありませんでした。ただ、日本より貧しく、宗教の信仰度が深いというイメージがあるだけでした」(学生A)、「私は、ベトナムについて全く知りませんでした」(学生B)、「私は授業を受ける前までは、戦争(内戦)が多いと思っていました。そして素足で歩いているのだと思っていました」(学生C)、といった学習前のベトナムについての印象は、前節で述べたように多くの学生に共通した認識であった。

授業を終えて「今回のベトナムについて学び、考える機会ができ、先生が実際に行った際に聞いた話を読み、親近感がわき、ベトナムを知ることができた。ベトナムに限らず、他の国にも目を向け日本と比べてみたりどんな国なのかを知りたくなりました」(学生A)というように肯定的な捉え方にほとんどの学生の認識が変化している。

「子どもたちがいろいろなスポーツをしていることやいろいろな宗教を持っていることも知りました」(学生B)、「ちゃんと靴をはいていました。そしてたくさんの民族がいることを知りました。ひとつひとつ民族衣装が異なっているのを見てすごいと思いました。そして子ども達は勉強するのも二部に分かれているのを知り、勉強するのはやはり大変だと思いました」(学生C)「勉強やスポーツを重視した国だということを知りました」(学生D)などのコメントは、目標1を達成したものと捉えることができる。特に「都会は都会でものすごく栄えているし、さらにその正反対の貧困層は道端で物乞いをしているような現実もあり…どっちの面も『ベトナム』なんだなと思いました」(学生E)は、ベトナムの文化的特性のみならず、社会的状況も、多面的に捉えることができたものと考えられる。

学生FおよびGのコメントは目標3にあげた類似点や相違点に着目したものである。「小学生の考え方が日本の子どもたちと違い、明確で現実味のあるもののように感じた。さらに尊敬されたり、重宝される職種が人気ようで、自分の小学生の頃とは大違いだと思った。そして将来の夢や自身の身の振り方について真剣であることに感心しました。また日本の子どもよりも精神年齢が高いと思いました」(学生F)は、相違点についてコメントしているが、「感心」してポジティブに受け止めている。「子どもたちは、貧しいながらも学校へ行き医者や科学者になろうとしていることが、苦しい環境の中であるから生まれる夢や職業だと思いました」(学生G)も相違点に着目しているが、「ベトナムの子どもも日本の子どももあまり大差がない」と共通性にも言及している。

「11才で科学者になりたいというのはすごいと思いました」(学生H)「ベトナムの子どもたち

表5. 学生のコメント

●学生A

授業を受ける前、私はベトナムがどこにあるのかさえはっきりわからないほど無知であり、興味はありませんでした。ただ、日本より貧しく、宗教の信仰度が深いというイメージがあるだけでした。しかし、今回のベトナムについて学び、考える機会ができて、先生が実際に行った際に聞いた話を読み、親近感がわき、ベトナムを知ることができた。ベトナムに限らず、他の国にも目を向け日本と比べてみたりどんな国なのかを知りたくなりました。

●学生B

私は、ベトナムについて全く知りませんでした。文化や習慣について少しでも知ることができ勉強になりました。貧しいだけではないということもわかりました。子どもたちがいろいろなスポーツをしていることやいろいろな宗教を持っていることも知りました。私は少しベトナムに行ってみたいと思いました。

●学生C

私は授業を受ける前までは、戦争（内戦）が多いと思っていました。そして素足で歩いているのだと思っていました。だけどちゃんと靴をはいていました。そしてたくさん民族がいることを知りました。ひとつひとつ民族衣装が異なっているのを見てすごいと思いました。そして子ども達は勉強するのに二部に分かれているのを知り、勉強するのはやはり大変だと思いました。

●学生D

正直ベトナムの今までのイメージは途上国であり、貧しい国というものや食べ物のことしかありませんでした。ですが、確かに貧しいなど思うこともありませんが、日本よりも成長のスピードが早い国だとわかりました。子どもは学校にも行けず字も読むこともできないという勝手な解釈によって良いイメージではありませんでしたが、勉強やスポーツを重視した国だということを知りました。

●学生E

ベトナムという国について少し誤解していたようです。都会は都会でものすごく栄えているし、さらにその正反対の貧困層は道端で物乞いをしているような現実もあり…どっちの面も「ベトナム」なんだなと思いました。

●学生F

小学生の考え方が日本の子どもたちと違い、明確で現実味のあるもののように感じた。さらに尊敬されたり、重宝される職種が人気のようで、自分の小学生の頃とは大違いだと思った。そして将来の夢や自身の身の振り方について真剣であることに感心しました。また日本の子どもよりも精神年齢が高いと思いました。

●学生G

ベトナムは戦争があつてとても貧しく子どもたちが学校に行かず働いているのだと思っていました。しかし、子どもたちは、貧しいながらも学校へ行き医者や科学者になろうとしていることが、苦しい環境の中であるから生まれる夢や職業だと思いました。また、ベトナムの子どもも日本の子どももあまり大差がないと思いました。

●学生H

一番驚いたことはベトナムの11才の子どもが「科学者になりたいとくに樹木の研究をしたい」と言っていることです。私は18才になった今でも将来の夢なんてまだあまいのに11才で科学者になりたいというのはすごいと思いました。

●学生I

非常に貧しい国だと思っていたが、意外にも学校や職業がたくさんあった。また学校があるということは貧しくもないということがわかった。そしてベトナムの子どもたちの勉強熱心な姿に私は感動した。またもっと汚いイメージだったが自然に囲まれていることに気づいた。そういうところは日本と変わらないうように思った。

●学生J

ベトナムは東南アジアの国でそんなに都会でないと思ってたけど、グーグルアースで見るとホーチミンはすごい都会で驚いた。そして、学生はとても勉強をがんばっていてほんとに前向きな人が多い国だと思った。ハンさんは貿易大学に行っていて勉強が大変なのにアルバイトをして家に仕送りをしているということで本当にすごいと思った。尊敬すべき！豊かだけどがんばらない日本人は見習うべきだと思った。

●学生K

4人のベトナム人は勉強がすごい好きなんだなあと感じた。3人は大学に行き、1人はストリートチルドレンの会で自分の夢のために勉強していた。私は保育士になりたいと思っているが、ペーパーテストや勉強は大嫌いだ。だから4人と私を比較して、4人の方が一生懸命に感じたから私も夢のために頑張らないといけないと思った。

●学生L

日本語の練習をして軽く話せるようになるなんて驚きました。学ぶ場はすくなくても自分のやりたい、学びたいという気持ちで世界が変わるのではないかと学びました。日本のように学ぶ場が当然のようにあると気持ちが薄れるのではないかとと思いました。

の勉強熱心な姿に私は感動した」(学生I)、「ハンさんは貿易大学に行っていて勉強が大変なのにアルバイトをして家に仕送りをしているということで本当にすごいと思った。尊敬すべき！」(学生J)、といったコメントは、目標2に関わるもので、人物について肯定的に受け止め共感していると捉えられる。

さらに、ベトナムの人々の姿を鏡として自分や日本を見つめ直す視点が「私は18才になった今でも将来の夢なんてあいまいなのに」(学生H)「豊かだけれどがんばらない日本人は見習うべきだと思った」(学生J)、「4人と私を比較して、4人の方が一生懸命に感じたから私も夢のために頑張らないといけないと思った」(学生K)「学びたいという気持ちで世界が変わるのではないかと学びました。日本のように学ぶ場が当然のようにあると気持ちが薄れるのではないかと思いました」(学生L)などからは何うことができる。

以上は、受講生の一部のコメントを示したにすぎない。しかし、他の多くの学生についても、ネガティブな捉え方からポジティブで共感的な捉え方へと変わることができていた。したがって、本教材で目指した「共感的な文化理解」については、概ね達成できたといえよう。

しかしながら、学生一部のコメントには、「大学に通っている人が結構多い」「ベトナムの子ども達は全て夢がある」といった適切でないものも見られた。大学進学率は決して高くないが、取り上げた4人のうち3人が大学生だったことが影響していよう。筆者の出会った人々は夢を語ってくれたが、すべての人が明確な夢があるとは断定できない。途上国＝貧しいというネガティブなステレオタイプに気づく学習活動が、別のステレオタイプを形成してしまうという問題は常につきまとう。より留意して学習を展開していく必要があったらう。

5. おわりに

本稿では、日本国際理解教育学会が示した「日本の他の地域や世界には自分達とは異なる多様な文化を持ったさまざまな人々が存在していることを知り、その違いを相互に認めあうことができる」という文化理解のあり方を、共感的理解という視点で捉え、ベトナムの子どもや若ものたちに着目した教材開発を試みた。その文化を担う「人」に着目した学習を構成することによって、共感が生まれ、違いを相互に認めあうことができる態度を養うことができるものと考えられる。

しかしながら、学習領域の「文化理解」は単独にあるわけではなく、「文化交流」「多文化共生」といった領域とともに上位の領域「多文化社会」を構成している。異文化を受容する態度を土台として、実際に異文化との交流をしたり、多文化共生のあり方を考え、行動することが必要となる。

今後は、「文化交流」「多文化共生」の領域において、それぞれのねらいに応じた教材を開発すること、さらに、領域間の関連性を整理することで、「多文化社会」を系統的に学習することのできるカリキュラムづくりを目指したい。

【付記】

- 本稿は、日本国際理解教育学会第17回研究大会（於：北海道教育大学札幌校、2007年7月28日）において発表した「ベトナムスタディツアーを基にした教材開発と実践」を加筆・訂正したものである。
- 本稿の執筆にあたり、ファシリテーター養成事業を主催した財団法人北方圏センター並びに、ご指導をいただきました北海道教育大学札幌校の天津和子教授、事業に参加しともに学んだメンバーの皆様に心より感謝申し上げます。

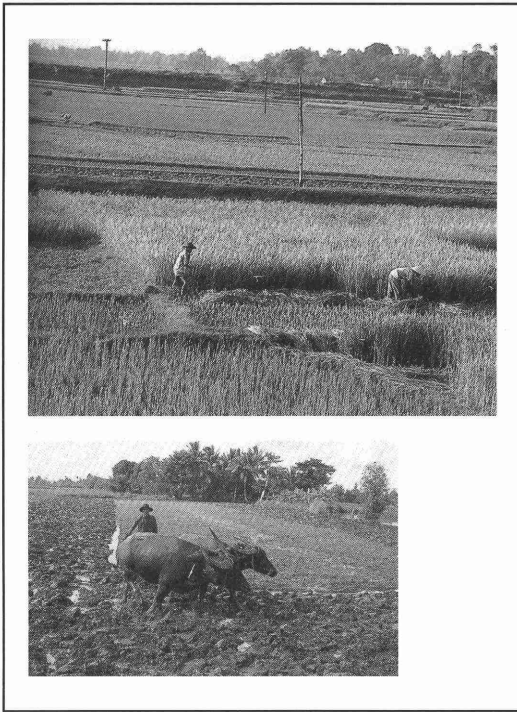
注

1. 日本国際理解教育学会編『グローバル化に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究』 2006
2. 天津和子「国際理解教育の学習領域」同上 第一分冊、pp. 18-25
3. 森茂岳雄・中山京子「多文化社会」前掲1. 第一分冊、p. 66
4. 平成18年度社団法人北方圏センター開発教育ファシリテーター養成事業は、2006年12月22-29日のスタディツアーに加え、10月と2月に事前・事後研修を行い、参加者がそれぞれ開発教育に関する教材作成を行った。訪問地は、ベトナムとカンボジアで、9名の参加者が2グループに分かれて訪問した。
5. 曾根宏之「開発教育ファシリテーター養成事業海外研修」『季刊北方圏 2007春号』vol139、p. 66
6. 資料1に示したフォトランゲージカードに用いた写真は、「民族」カードを除いて以下の文献より引用した。
『世界のくらし23 ベトナムのくらし』ポプラ社、1997
『世界の子どもたちはいま16 ベトナムの子どもたち』学習研究社、2001
大貫美佐子『きみにもできる国際交流6 ベトナム』偕成社、1999
民族カードは、ベトナムで入手した54の民族が描かれた切手である。
7. 『世界の子どもたちはいま16 ベトナムの子どもたち』学習研究社、2001、pp. 58-63
8. 同上
9. Benesse教育研究開発センター『第1回子ども生活基本調査報告書』
http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikat_u_data/2005/index.shtml
(2008. 2. 5検索)

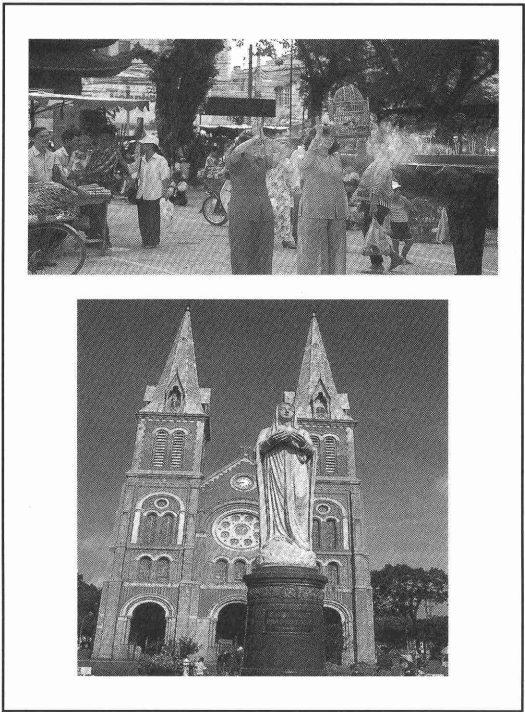
くりやま たけひろ 本学コミュニティ総合学科講師
E-mail : kuriyama@bwmjc.ac.jp

【資料1】教材1：フォトランゲージ「ベトナムの生活」解説カード

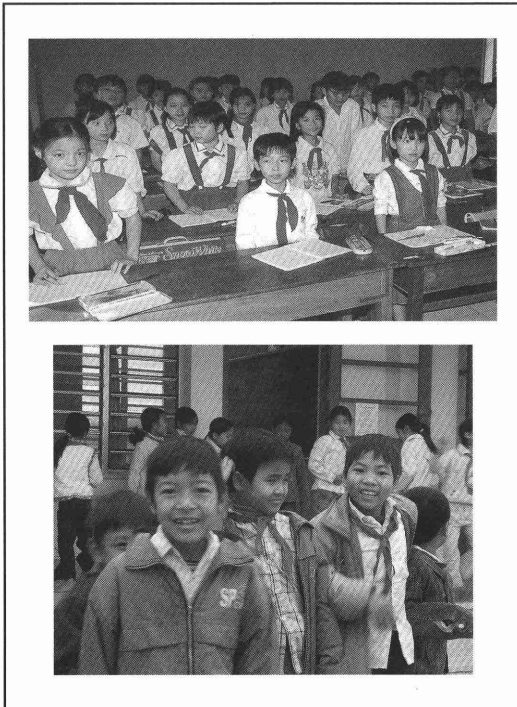
農 業



宗 教



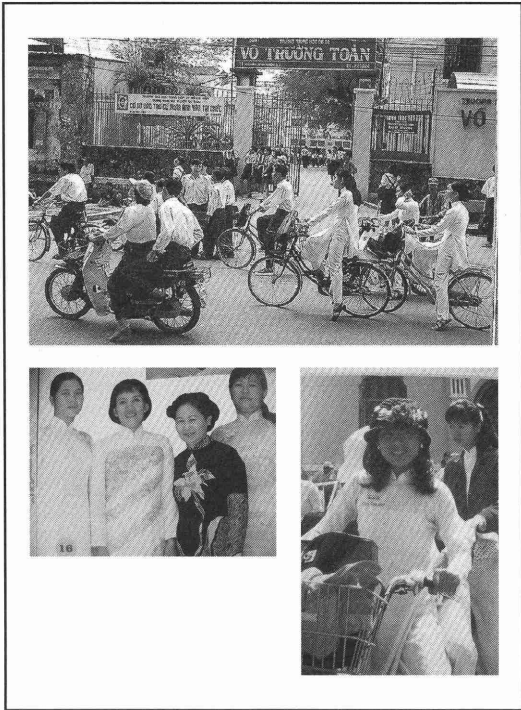
学 校



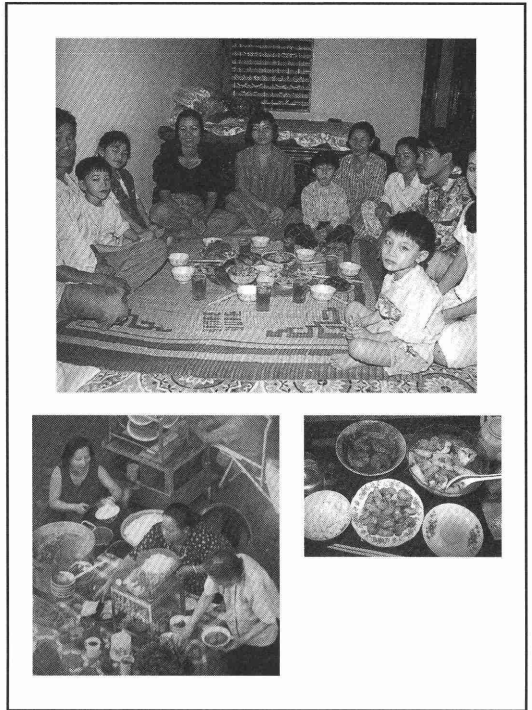
民 族



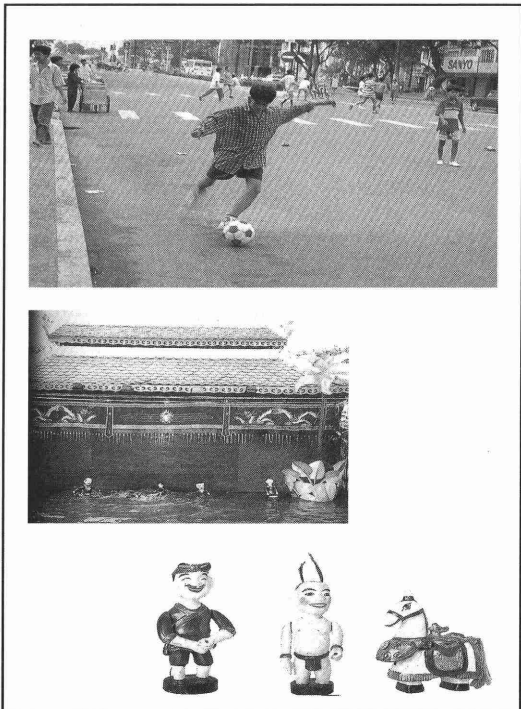
伝統衣装 (アオザイ)



食 事



子どもの楽しみ



【資料2】教材1：フォトランゲージ「ベトナムの生活」解説カード

農業

ベトナムでは、全人口の約70%が農業に従事している農業国です。北のホン川流域のデルタと南のメコンデルタに広大な農地が広がっており、稲作中心の農業が営まれています。北部では、年二回、南部では年三回、米が収穫できます。

そのため米の輸出量は、タイについて世界第二位です。また、最近では、コーヒーや果物など輸出向けの作物栽培も盛んに行われ、特に山岳地帯を中心に栽培されるコーヒーの生産量は、ブラジルについて世界第二位になっています。

民族

ベトナムは、54もの民族が住んでいる多民族国家です。8300万人の人口のうち90%を占めているのがキン族で、主にデルタ地帯や海岸、都市部で暮らしています。残りの10%ほどが53の民族で構成されており、多くは山間部に住んでいて、モザイクのような住み分けをしています。

学校

ベトナムでは、日本と同様、6歳になると小学校に入学します。小学校の5年間は義務教育です。希望者は、つづいて4年間の中学校、高校（3年間）、大学（4～5年間）にすすむことができます。小・中学校は先生や校舎の数が少ないため午前と午後の二部制が多く、夜間も入れて三部制をとっているところもあります。授業数が少ないこともあって塾が盛んです。

宗教

ベトナムには、中国から仏教、儒教、道教などが伝えられ、ヨーロッパからはキリスト教がはいつてきました。そのため仏教やキリスト教の信者が多くいます。また南部には、カオダイ教やホアハオ教という宗教が盛んや地域があります。その他、山岳民族は土着のアニミズムを信仰していることが多いです。

伝統衣装（アオザイ）

アオザイは、ベトナム女性の民族衣装です。アオザイとは「長い（アオ）上着（ザイ）」という意味で、ウエストの上までスリットの入った長い上着と、ゆったりしたズボンからなります。ホテルのカウンターや土産物店でよく見かけますが結婚式やパーティなどあらたまった場所できるもので日本の着物のようなものです。また、高校の制服にしている学校もあります。

食事

ベトナムでは、日本と同様、ふつう1日三食。宗教的なタブーはないので、一般的には肉でも魚でも何でも食べます。朝食でよく食べられるのは、おかゆやめん類で、フォーと呼ばれる米粉でつくった麺料理が有名です。家族が集まる夕食では、肉料理や魚料理、野菜の煮物、スープなどが食卓にならびます。日本のものよりも長くてパラパラしたご飯に、魚や野菜スープをかけて食べるのがベトナム流です。

子どもの楽しみ

ベトナムでは、サッカーや武道が子どもたちには、大人気です。主な都市には、児童文化会館という施設があり、学校が終わったあとに、スポーツや音楽、芸術、演劇などの習い事ができます。こうした施設以外でも路上でサッカーやバトミントンを楽しんだりします。

また、村の祭りなどで上演される、水上人形劇が子どもたちに人気です。劇場に、小さな池がつくられ、この水の上で、民話や村の生活などをテーマにした人形劇が行われます。

【資料3】 教材2「ベトナムの若もの」プロフィールカード

プロフィールカード1

ハンさん 21歳 女性

わたしの名前はハンといいます。いま、ベトナム貿易大学ホーチミン校の学生です。日本語の勉強もしています。私の出身は、メコンデルタの近くの町です。父は、漁師で、母は、市場にお店を出しています。4人兄弟だし、裕福な家庭ではないので、奨学金をもらって大学に通っています。また、日本語が少しはなせるので、日本人がよくくるお土産物店でもアルバイトをしています。アルバイトの給料が多いときは、実家に仕送りもします。でも学生は勉強することが役目なので、忙しくてもつらくても勉強が一番優先させています。

プロフィールカード2

クイさん 22歳 男性

わたしは、ホーチミン市のスポーツ（体育）大学に通っています。小さい頃から勉強も好きだったけれど、体を動かすことはもっと好きでした。大学でも普段から、スポーツをしているけれど、休みの日もテニスをして過ごしたりしています。ベトナムでは、児童文化会館でスポーツの習い事ができるけれど、その中から優秀な人は選抜されて選手になっているんだ。僕もそんな選抜選手の一人です。日本から来た先生に、指導を受けて、そのスポーツに打ち込んでいます。

プロフィールカード3

ヤンくん 11歳 男性

ぼくの名前は、ヤン。お父さんは小さい頃死んでしまっ、お母さんと二人暮らし。お母さんは、路上で宝くじをうって生活費を稼いでいる。お母さんが稼いだお金だけだと、学校いく余裕はないんだ。だけど、大人の人が紹介してくれた「ストリートチルドレン友の会」っていう施設で、勉強を教えてもらったり、夜間学校に通わせてくれたりしてるんだ。3か月くらい前からは、日本語も教えてもらっている。自己紹介や、ドレモン（ドラえもん）やPuffyの歌を日本語でできるようになったよ。友だちとサッカーやバスケをしているときもすごくたのしい。施設の友だちの中には、里親がいて、学費や文房具のお金をもらっている子もいる。僕も、いつか里親が見つかるといいなー。

プロフィールカード4

ハイさん 21歳 女性

わたしの名前はハイ。今は、医療大学に通って、薬学の勉強をしているわ。実は、生まれつき、足に障がいをもっているの。6人の兄弟のうち私だけ。でも、不幸だとは思ってないわ。だって私には、障がい者マラソンっていう生きがいがあるから。障がい者マラソンを通じて、私と同じような障がいをもった仲間と出会えたり、障がい者のスポーツ大会で、外国にもいけたんですもの。

【資料4】 教材2「ベトナムの若もの」夢カード

プロフィールカード1 ハンさんの夢

夢カード

将来は、留学して、外国の大学で経済学や経営学を学びたい。そして、外国の企業につとめるか、自分で会社をおこしてみたいとも考えています。

プロフィールカード2 クイさんの夢

夢カード

将来は、空手の指導者になりたい。小さいころから、空手を習ってきたからね。今は、現役の選手として、毎日、練習に励んでいるけど、選手生活の後は、指導者になって、後輩たちを育てていきたいんだ。

プロフィールカード3 ヤンくんの夢

夢カード

将来は、科学者になりたい。とくに、樹木の研究を試みたい。森がたくさんある国だから。

プロフィールカード4 ハイさんの夢

夢カード

将来は、事業をはじめたい。病院や福祉施設をつくりたいと思います。もっとたくさんの人が安心、安全に暮らせる社会が必要だと思いますから。

その他の夢カード（はずれカード）

夢カード

今は、何になりたいかはまだよくわからない。どんな会社につとめるか、よりも安定した収入が得られるなど自分の条件にあった会社につとめられればいいと思います。

夢カード

将来は、剣道の指導者になりたい。小さいころから、剣道を習ってきたからね。今は、現役の選手として、毎日、練習に励んでいるけど、選手生活の後は、指導者になって、後輩たちを育てていきたいんだ。

夢カード

将来は、野球の指導者になりたい。小さいころから、野球を習ってきたからね。今は、現役の選手として、毎日、練習に励んでいるけど、選手生活の後は、指導者になって、後輩たちを育てていきたいんだ。

夢カード

将来は、大工になりたい。そして、たくさんの家やビルをたてるのが夢です。もちろん自分の家も建てたいんだ。

夢カード

大学で学んだことを生かして、薬剤師になりたい。資格を得て、その資格を生かす仕事がしたいと思い、大学にはいったんですもの。私の両親も、そのため高い学費を払って大学に通わせてるんだと、いつも言っています。

※カードの実物は、プロフィールカード、夢カードともにA5サイズである。プロフィールカードと夢カードの裏には人物のイラストが描かれており、組み合わせが正解の場合、A4サイズで下記のイラストが完成する。

人物イラスト



※実物は、色鉛筆で彩色してある。